

湿地を訪ね、
湿地に学ぶ

湿学のすゝめ

三番瀬
谷津干潟 編

はじめに

名古屋市の南西部、庄内川・新川・日光川の河口部に広がる藤前干潟は、多くの生き物が暮らす「生き物の宝庫」。地球を旅する渡り鳥たちが羽を休める重要な中継地としても知られています。

30年以上前、ごみの量の増加に伴い藤前干潟をごみの埋立処分場にする計画が発表されました。しかし、藤前干潟保全の機運が高まるなか、名古屋市は1999年1月に埋立計画の中止を発表。翌月「ごみ非常事態宣言」を出し、市民・事業者・行政総出でごみの減量に取り組むことで、藤前干潟は守られました。

藤前干潟は、2002年11月18日にラムサール条約の「国際的に重要な湿地」に登録されました。以降、藤前干潟では、清掃活動や干潟体験イベントなどさまざまな活動が行われています。

ラムサール条約登録から約20年。名古屋市では藤前干潟の保全・活用をより促進するため、「国内湿地交流事業」を実施しています。本事業は、湿地を保全・活用するための優れた取り組みを行っている国内のラムサール条約登録湿地等を視察し、そこで得た知見を藤前干潟の活動に活かすことを目的としています。湿地について学ぶことから「湿学」と名付けました。

この報告書は、他の地域の湿地の取り組みから何を学び、藤前干潟の保全・活用にどう活かすのか、派遣者の立場からまとめたものです。



事前学習会

視察を前に派遣者が集まり事前学習会を行いました。
藤前干潟について学び、視察先である谷津干潟や三番瀬についての理解を深めました。

■日時 令和5年8月11日（金・祝）
■場所 環境省稲永ビクターセンター・名古屋市野鳥観察館



体験して初めて気づくこと

NPO法人藤前干潟を守る会のガタレンジャーのみなさんとともに、干潟体験を行いました。

藤前干潟の中に入るのは、ケガ等の危険性があるため、イベントなどで管理者と一緒に入ることが推奨されています。

さを実感できます。帰り際にはごみ拾いを行いました。短時間でしたが、ごみがたくさん回収でき、ごみの多さを体感することになりました。

干潟体験の他には、名古屋

稲永ビクターセンターから歩いて10分ほど。入る前は3つの約束を確認します。1つめは「生きものたちと仲良くしよう」、2つめは「楽しいことは分け合おう」、3つめは「けがは自分持ち、気をつけよう」。生きものたちの住処であるため、「お邪魔します」と言ってから入りました。

古屋市野鳥観察館で野鳥観察を行いました。大型の望遠鏡が30台もあり、大人数でも野鳥を観察できる設備が整っています。藤前干潟にいる鳥の種類

石をひっくり返すとタカノケフサイソガニなどのカニやヤマトシジミなどの貝がたくさん。藤前干潟の生きものの豊かな



保全の意義と今後の課題

NPO法人藤前干潟を守る会の亀井浩次さんから、藤前干潟の保全の歴史を学びました。

かつて、藤前干潟にはごみの埋立処分場を建設する計画がありましたが、市民の保全意識の高まり等を受け、名古屋市の計画を中止。藤前干潟は保全されることになりました。

生態系に重要な役割となっている藤前干潟ですが、海洋ごみやマイクロプラスチックの問題は、大きな課題となっています。「そこにあるごみは拾うしかないが、しかしそれでは解決にならない。」美しく豊かな海を次の世代に残していくために、海に負荷をかけている行為に目を向け、私たちでできることを行い、社会全体でも対応していかなければなりません。



視察先の湿地について知る

株式会社自然教育研究センター海上智央さんとオンラインでつなぎ、谷津干潟についてのDVDを鑑賞した後、三番瀬の歴史や環境問題について学びました。

株式会社自然教育研究センターでは「自然とともに生きる地域と人づくりのコーディネート」をキャッチフレーズに、自然公園や都市公園で自然教育・環境教育を行う施設の運営や解説員を配する事業を行っています。その施設のうちのひとつが今回訪れる浦安市三番瀬環境観察館です。

東京湾も広大な干潟が埋め立てられ、反対運動によって一部が守られた歴史があり、藤前干潟とよく似た過去を持つことを知りました。

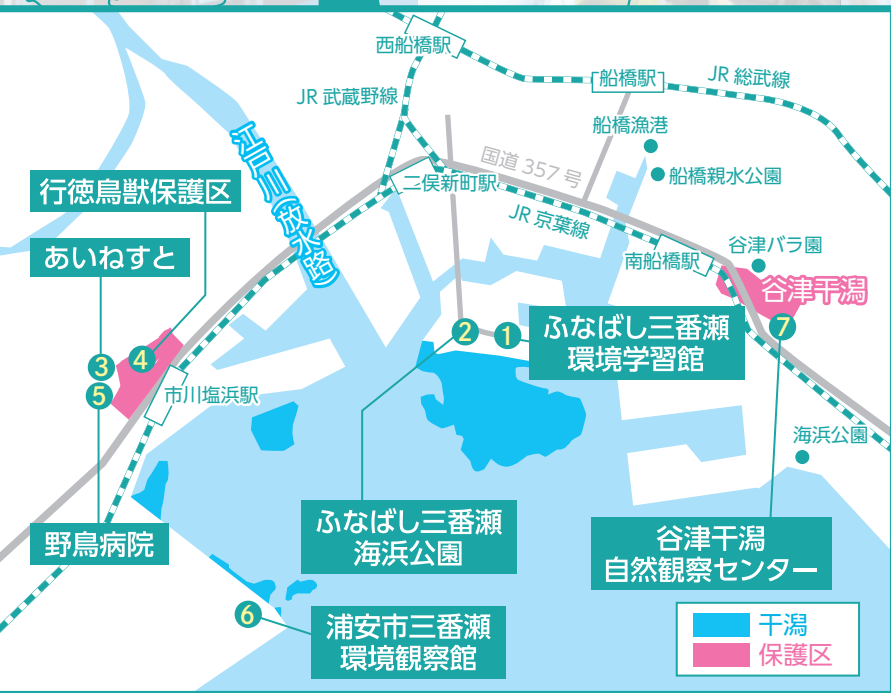
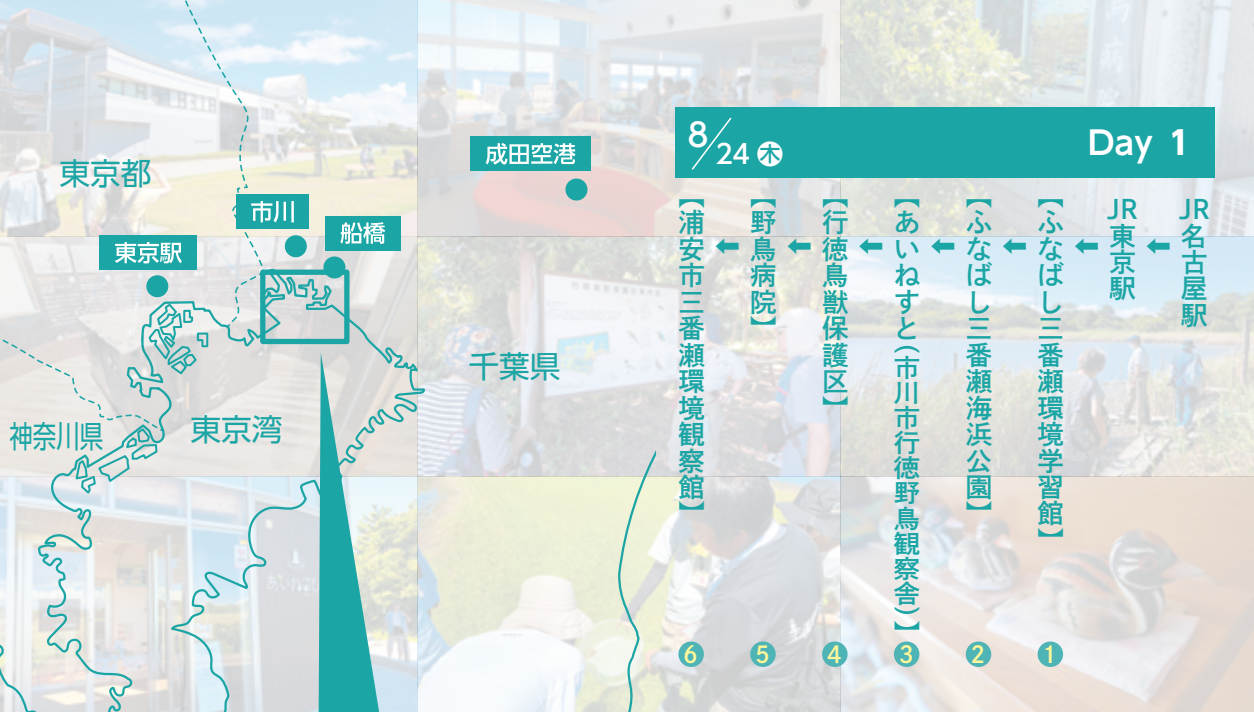
谷津干潟や三番瀬の映像や写真を見せていただき、藤前干潟とはどのような類似点や相違点があるのか、現地視察で見ることが楽しみです。



藤前干潟～市民によって守られた都会のオアシス～

藤前干潟は名古屋市などに位置し、ラムサール条約登録湿地面積 323ha の広さを誇る干潟です。藤前干潟には多くの生きものが生息し、泥の中に住むゴカイや貝類などの底生動物、それを餌とする多くの渡り鳥などが訪れます。

藤前干潟は水鳥を支える場所であること、動植物にとって生存や保全のために重要な生育環境となっていることから、2002年にラムサール条約に登録されました。



現地視察／旅の記録

Special Thanks !

お世話になった方々

NPO 法人藤前干潟を守る会

亀井 浩次 さん

梅村 幸稔 さん

NPO 法人海の自然史研究所

今宮 則子 さん

都築 章子 さん

株式会社自然教育研究センター

海上 智央 さん

松田 直孝 さん

ふなばし三番瀬環境学習館

小澤 鷹弥 さん

NPO 行徳自然ほごくらぶ

野長瀬 雅樹 さん

市川市環境部自然環境課

圖司 宗徳 さん

谷津干潟自然観察センター

馬渡 和華 さん

ほか職員のみなさま

ボランティアスタッフのみなさま

お世話になった施設

ふなばし三番瀬環境学習館 ①

千葉県船橋市潮見町 40 番



ふなばし三番瀬海浜公園 ②

千葉県船橋市潮見町 40 番



あいねすと(市川市行徳野鳥観察舎) ③

千葉県市川市福栄4丁目22-11



行徳鳥獣保護区 ④

千葉県市川市新浜3丁目



野鳥病院 ⑤

千葉県市川市福栄4丁目22-11



浦安市三番瀬環境観察館 ⑥

千葉県浦安市日の出7丁目9-1



谷津干潟自然観察センター ⑦

千葉県習志野市秋津5丁目1-1





8/24(木) | Day 1

三番瀬に学ぶ

- ① 【ふなばし三番瀬環境学習館】
- ② 【ふなばし三番瀬海浜公園】
- ③ 【あいねすと（市川市行徳野鳥観察舎）】
- ④ 【行徳鳥獣保護区】
- ⑤ 【野鳥病院】
- ⑥ 【浦安市三番瀬環境観察館】

震災で閉鎖されたプールを アップサイクルした環境学習拠点

ふなばし三番瀬環境学習館の館内の展示スペースは、床に生きものを投影したり、クイズや体験スペースがあったりと仕掛けが多く、子供たちが遊びながら学べる工夫が満載でした。2階にある「触れる地球」は、大きな地球儀を触って動かすことにより、温暖化や森林破壊の状況などがそこに映し出され、地球規模で考えることを体感できる素晴らしい展示でした。

興味の入りを広げるために、干潟の生きものに関連だけでなく料理や工作など多岐に渡るワークショップを毎週土日に開催しており、訪問時は夏の特別展も開催されていました。特別展のゲームプログラム、展示物、



人々と干潟を結びつける場所

ふなばし三番瀬海浜公園の目の前には人工干潟があり、三番瀬の沖から持ってきた砂から作られています。この干潟を保全するために、風で飛ばされた砂を干潟に戻す活動やボランティアがごみを拾うなどの活動をされています。

ふなばし三番瀬海浜公園前の干潟は、人工的に作られた干潟であるため、深いぬかるみにはまるなどの危険が少なく、干潟デビューにもってこいの場所になっています。

ここでは、子供たちが実際に潮干狩りをするなど干潟を身近に体験できるようになっています。ふなばし三番瀬海浜公園前の干潟には、船橋市の55校の全ての小学校から子供たちが郊外学習にやってくるこの干潟と実際に触れ合うこと



気軽に立ち寄れる 8の字施設

あいねすとは、行徳鳥獣保護区の一角にあります。隣地には、宮内庁新浜鴨場があり、緑に囲まれた場所に建てられていました。現在は3代目の施設でガラス張りの2階建てです。

館内には喫茶スペースもあり、望遠鏡や双眼鏡が無料で貸し出され、ユニークな回遊型動線にて、ゆったりくつろげるスペースでした。また、保護区内で見られる野鳥の写真付き説明もあり、勉強もできるよう工夫されていました。



三番瀬～東京湾の恵みを支える豊穡の海～

三番瀬は東京湾の一番奥にある干潟と浅海域で、約1,800haの広さを誇ります。埋立用の土砂を掘った場所や航路で急に深くなることが多い湾奥部の中で三番瀬は水深が浅く、酸素の供給が活発なため、多くの生きものが生息できる環境になっています。

戦後の埋め立てから残された三番瀬は、現在でも栄養の豊かな浅瀬で多くの稚魚が育ち、漁業も盛んに行われています。また、ゴカイや貝など多くの底生動物も生息しており、それらを餌とする鳥たちも多く訪れるバードウォッチングの名所です。

生きものの最優先、 多様性に富んだ努力の結晶

行徳鳥獣保護区は、千葉県市川市に位置しおよそ56haの広さを誇る人工的な湿地帯です。かつて周辺地域は鳥類やカニ、ハゼなど多様な生きものが生息する貴重な湿地でした。しかし、1965年ごろより東京湾の埋め立てが始まり、一帯は埋め立てられてしまいました。

多様な生きものが生息する行徳の湿地を復元し保全していくため、自然保護を最優先とした行徳鳥獣保護区が造成されました。

保護区内の水場には有機物の豊富な生活排水を再利用し、水車により水に酸素を与えたり、定期的に池の水を抜いたり水鳥にとって住みやすい水場を維持しています。また、広大な敷地内の手入れは職員とボランティアが積極的に行っており、生きものに配



慮して農業の使用を制限するなど自然を優先した環境づくりに取り組んでいます。東京湾と水路で繋がった汽水環境であり、泥干潟も広がるためトビハゼやカニ類が非常に多く生息しています。中でも、行徳鳥獣保護区は日本でトビハゼが住むことのできる最北端の環境であることも知られています。虫も1500種類ほど生息し、カワウのコロニーや多数のカニの巣穴など、保護区内でそれぞれの生きものの生活を感じることができました。

困っている鳥の 居場所づくり

野鳥病院では衝突事故などで傷を負い、飛べなくなってしまう野鳥が千葉県内から持ち込まれ、保護されています。年間200羽ほどが

やってきて、常時70羽ほどが暮らしています。一般公開されており、行徳を訪れた人々も気軽に野鳥の観察をすることができます。

無事退院（放鳥）できるのは、3〜4割程のことです。自然に帰すことの難しさを痛感しました。



近くて遠い 三番瀬をもっと身近に

浦安市三番瀬環境観察館は、三番瀬の西側、埋め立てで面積が4倍になった浦安市の埋め立て地先端近くに2019年にできた施設です。2022年に親水護岸が完成し、毎月の体験プログラムで立ち入れるようになりました。三番瀬を広く見渡せ、双眼鏡では対岸の幕張辺りや係留されている南極観測船しらせ5002が見えました。かつてこの広大な沿岸一帯がすべて干潟だったと思うと、古の豊かな東京湾を支えてきた一因が、この三番瀬にあったことを感じました。

館内は三番瀬で見られる生きものの紹介に特化され、多種多様な干潟の生きものが、イラストやオブジェ、動画や標本で分かりやすく展示されていました。案内いただいた海上智央さんが、豊富なゴカイの液浸標本やネクトキータ幼生の動画を、楽しそうに説明してくれたことがとても印象的でした。生きもの紹介のリーフレットや、イシガニ・

イソガニに、トゲワレカラの3種のペーパークラフトは秀逸です。干潟の豊富な生きものたちを身近に感じられるように、非常によく考えられた展示でした。



戦略的な保全活動

海上智央さんからインタビュー（以下、IP）についての講義を受けました。IPとは、コミュニケーションの一種で、一般的には自然解説の意味として知られています。実際にはもっと深い意味があり、「参加者を挑発（考えを刺激）し、資源（自然・歴史・文化）との個人的なつながり（知的・感情的）をつくることを目的とした方法」と定義されています。まずは、IPの入門として、IPが持つ効果、4つの原則*TOREについて学びました。4つの原則ではそれぞれのパートで簡単なワークを通して理解を深め、参加者同士で交流を深めながら実践的に学びました。

最後に、自分達で相手を刺激するようなテーマ文を作成するというワークを実践し、IP講義のまとめとしました。

自然を保全しなければならない事は分かっている、実際に行動しようとなると何をしたらいいのか分からない事も考えられます。IPの講義を通して、自然と個人的な関わりを持たせるよう促す事によって、より行動できる人を増やしていきたいと思いました。

※T: Thema

（テーマがある）

O: Organized

（整理されている）

R: Relevant

（関連性がある）

E: Enjoyable

（楽しさがある）





8/25 金 | Day 2

谷津干潟に学ぶ

【谷津干潟自然観察センター】

⑦

市街地の中にある貴重な場所

国道と高速道路に挟まれた市街地に、どこから切り取って貼り付けたような豊かな自然が広がっています。木々の緑や四季うつろい、淡水の生態から海に開く干潟まで、決して広くない面積ですが、予想を超える豊かで様々な自然を体感できる貴重な場所です。施設は外観からして魅力がすごい。グレー基調の石造りで、美術館や博物館のような落ち着いた周りの自然に溶け込んで、そしてどこか懐かしい。この施設を建てる時に込められた思いや物質の密度が力になって施設の存在感になっている気がしました。中に入ると、これまた魅力の掛け算で、大きなガラスの窓…ではなく、ガラスの壁のようにぐ



谷津干潟独自のワイズユース

谷津干潟には、外来種であるホンビノスガイとマイクログラスチックの2つの課題がありました。外来種であるホンビノスガイについては、数が多いことや、谷津干潟に飛来する鳥の脚や嘴に挟まり、怪我をしたり死んでしまったりすることが影響としてありました。対策として2つのことを行っています。1つめは、イベントとして、ホンビノスガイの潮干狩りを行っています。数分で数十キロにもなるほどとることができ、イベント参加者に持ち帰ってもらい、利用してもらっているそうです。2つ目は、ホンビノスガイの貝殻を集めて島を作ったり、貝殻を細かく割り、施設の屋上に敷いたりして、鳥の休憩所や営巣地にしています。マイクログラスチックについては、対策としてユースメンバーによるマイクログラスチックを使用したレジンの指輪作りを行っています。実際に体験してみると、干潟に



東京湾再生官民連携フォーラム

東京湾の窓プロジェクトチーム

年間数百万人の利用者があ

2017年ー2019年には



谷津干潟～自然とつながる、人とつながる干潟～

谷津干潟は東京湾の最奥に広がり、主に千葉県習志野市に位置するラムサール条約登録湿地面積 40ha の干潟です。豊かなプランクトンや底生動物が生息し、様々な渡り鳥の中継地としても重要な役割を果たしています。谷津干潟は 1970 年頃まで行われた埋め立てにより縮小されましたが、残った干潟は当時の市民にとってのシンボルとなり、活発な保全活動が行われるようになりました。

そして谷津干潟は 1993 年に、干潟の環境としては初めてラムサール条約に登録されました。現在も谷津干潟自然活動センターを中心に谷津干潟の豊かな自然を守っていくため、干潟の周囲は観察デッキや遊歩道が整備され、身近な干潟として愛される環境を作っています。

谷津干潟自然観察センターのボランティア体制

ボランティアの仕組み

小中学生からジュニアレンジャーとして少しずつ干潟を学び、高校大学生になるとユースとしてさらに発展的な調査や企画を行います。そして最終的にボランティアとして活動するという、一連の流れが作られています。この流れがあることで興味や関心を絶やさず、年齢が上がるにつれて増えていく「できること」を谷津干潟で実践することが出来ます。これは未来にも繋がる良い仕組みだと感じました。

様々な世代のボランティア活動を支援し、谷津干潟を守る人の輪を広げています。



若い世代の活動内容

ジュニアレンジャーはラムサール条約登録10周年の2003年に、ユースは20周年の2013年に、活動が始まりました。

ジュニアレンジャーは一人ずつ活動ノートがあり、ミッションをクリアしてスタンプを貯めるとレベルが上がります。来館していたジュニアレンジャーのナオくん(中3)にノートを見せてもらいました。〈干潟を知る〉〈干潟を守る〉などの活動のほか、自分たちが得た経験や知識を来館者に案内する〈干潟を伝える〉など様々な活動を行っています。楽しみながら体験し、成長することが出来ます。

ユースでは、自らが底生生物の調査をしたり、イベントを企画しています。ジュニアレンジャーを卒業しても同世代で活動できるグループがあることはとても魅力的です。



多分野におけるボランティアグループ

開館当初からボランティア活動が盛んで、現在は21のグループで約140人が多分野で活動しています。センター内にその活動紹介がありました。例えば、展示用のおもちゃを手作りするグループ、観察会を企画運営するグループ、自然情報グループ、さらに、ボランティア活動の通信誌グループ、ホームページグループなど、かゆいところに手が届く活動ばかり。年間延べ約1500人の活動があります。

センタースタッフがコーディネートとして活動の案内や補助、研修等を行っているのも長く活動ができている秘訣です。たくさんさんのボランティア活動で、谷津干潟の保全の今があります。



谷津干潟の保全のはなし

どろんこサブウー谷津干潟を守る闘い―(松下竜一著 講談社1990年出版)という本があります。干潟を救うため、ごみを拾い始めた森田三郎さんの物語です。

始めは周囲の人に理解されず妨害されることもありましたが、それでも続けられたのは、幼い頃、谷津干潟で毎日泥だらけになって遊んだ思い出があったから。徐々に支援が増えて保全されることが決まりました。

森田三郎さんは2021年に逝去されました。谷津干潟自然観察センター副館長の永井祐紀さんに、どんな方だったか聞いてみました。「寡黙で気軽にお話するような感じではなかったけれど、自分の想いを行動で表すような方でした。懐かしいなあ。」と、優しいお顔で話されたのが印象的でした。





事後学習会

視察を終え、事後学習会を行いました。視察を振り返るとともに、今後、藤前干潟においてどのような活動を展開できるのかを話し合いました。

■日時 令和5年9月7日(木)
■場所 名古屋市環境学習センター(エコパルなごや)



すぐにできそうなこと

学ぶ

- ・どんな活動がされているかを知る
- ・これまでに開催されたイベントの内容を学ぶ

伝える

- ・知り合いに藤前干潟について伝える

活動する

- ・ごみ拾い

いつか実現したいこと

教育

- ・市内小学校の社会見学先や校外学習先に組み込む
- ・先生になったときに子供たちを連れてくる

発信

- ・SNSを使った情報発信をする
- ・藤前干潟の保全活動を通じて、自然環境や気候変動を意識した行動をしよう!という発信をする

参加する

- ・イベントや活動に参加し、経験を増やしたり理解を深める

作る

- ・藤前干潟の良さや生きものを紹介するパンフレットを作る
- ・干潟について学ぶことができるおもちゃを作る
- ・センターに工作ができるスペースをつくる

企画

- ・生きものの特徴がゲーム形式で分かるようなワークショップを作る
- ・マイクロプラスチックを使ったリユースを考える
- ・藤前干潟ならではのワイズユースを探す
- ・保全活動を行った藤前干潟を守る会の辻さんの物語の本を作る
- ・小中高大学生向けの懸賞付き研究発表会を定時開催する
- ・子ども専用のラボのスペースを作る

行う

- ・ユース世代を集めて未来について考えるワークショップを開催する
- ・家族や友達を藤前干潟に連れてくる
- ・干潟の定期的な写真撮影をする
- ・周辺の植生や昆虫・クモ類等の調査をする
- ・〈四季ごとに1回、藤前干潟に来てみませんか〉のポスターをセンターに掲示し、来館者に提案する

ネットワーク・活動の強化

- ・藤前干潟だけでなく、周辺施設も巻き込んだイベントを実施する
- ・姉妹干潟・湿地として連携し、互いのノウハウなど情報を交換・共有する
- ・他の施設のボランティアと交流する
- ・干潟を眺めながらお茶を楽しめるカフェコーナーを設置する
- ・ボランティアの流れを整える
- ・企業を受け入れる体制づくり
- ・交通網を整備する

今後に向けたメッセージ

事後学習会の最後に、NPO 法人藤前干潟を守る会の梅村さんに、「藤前干潟にある稲永ビジターセンター、藤前干潟活動センター、名古屋市野鳥観察館を、わざわざ来てもらう施設ではなくふらっと来てもらえる、また、学ぼうという意味がなくても気づいたら学んでいるような施設に一緒にしていきたい。若い人を中心に、ベテランはそれを支えるというふうにして、共に頑張っていきたい。」というメッセージをいただきました。

今回の国内湿地交流事業を通じて得た知見やネットワークを今後の藤前干潟での取り組みに活かしていきたいと思います。



派遣者 (50音順)

年齢も職業も違う 11人が湿地についてともに学び、この報告書を制作しました。

安藤 智明	岸 晃大	小林 遼香	佐藤亜和音
鈴木 朋子	中島 蒼太	服部 祐佳	松井久二子
山口 紗香	山田 哲也	梅村 幸稔	

発行/名古屋市環境局環境企画課

〒460-0008 名古屋市中区栄一丁目23番13号 伏見ライフプラザ13階
TEL 052-223-1066 FAX 052-223-4199

発行年月/令和5年10月



ミックス
紙 | 責任ある森林
管理を支えています
FSC® C100107